

2015年度 人間科学部会シンポジウム 「保育の魅力—子どもの生活に寄り添う保育—」

Charm of Childcare
— Childcare to Become Close to the Child's Life —

開 仁 志 抄録
Summarized by Hitoshi HIRAKI

〈要旨〉

平成27年4月、「子ども・子育て支援新制度」が施行され、全ての「子どもの最善の利益」の実現、みんなが子育てしやすい社会づくりのための新しい夜明けの年となった。その大きな節目に、本学こども学科が、指定保育士養成施設として認可を受け、「幼稚園教諭1種免許状」と「保育士資格」の両取得が可能になった。そのことを記念して、シンポジウムを開催した。シンポジストには、幼保連携型認定こども園長、保育所長をお招きし、附属幼稚園長や本学教員も交えて、「保育の魅力—子どもの生活に寄り添う保育—」をテーマに思いを語り合ったものである。

その内容を抄録として載せる。

〈キーワード〉

保育の魅力、子どもの生活、寄り添う保育

日時：平成27年12月5日(土) 13:00~16:00

会場：金沢星稜大学 A11講義室



〈シンポジウム風景〉

木村 昭仁 氏のプロフィール

〈龍雲寺学園パウデア学舎 学園長・理事長〉

外資系企業を経て、お寺を継ぎ保育園長となる。日本の保育とヨーロッパを中心とした保育の常識の大きな違いに驚き、自園の改革を進める。共著本や専門誌や週刊紙まで幅広く執筆、ラジオ番組のDJ等でも活躍。現在 龍雲寺学園パウデア学舎学園長・理事長、NPO法人子どもの発達支援センター理事長、日本保育協会石川県支部長、全国保育問題検討会委員、全国認定こども園協会金沢地区会長、大学や養成校の講師。

西村 健 氏のプロフィール

〈未来のひろば 園長〉

金沢大学教育学部附属幼稚園にて非常勤で保育補助を行う。その後小学校教員を目指していたが、中学校での非常勤講師、家庭教師等のアルバイト、小学校での臨任講師を経て、若松保育園の副園長になる。

平成16年4月より園長になり、平成24年12月より保育所名が認可保育所未来のひろばに変更された。

現未来のひろば園長。

島田 裕香子 氏のプロフィール

〈金沢星稜大学附属星稜幼稚園 園長〉

卒業とともに社会福祉法人泉の台幼稚園に就職25年の在任中、主任保育士を13年務める。また、この間に日本ムーブメント教育(障害児のための)教師資格、モンテッソーリ教師資格、在宅子育て家庭支援専門員取得、その後、社会福祉法人 光保育園園長、金沢市保育士会会長を経て、現金沢星稜大学附属星稜幼稚園園長。

福井 逸子 氏のプロフィール

〈金沢星稜大学人間科学部 准教授〉

兵庫県西宮市出身、西宮市内の公・私立幼稚園で、13年間幼稚園教諭(内10年間主任教諭)として働く。その後、聖和大学(関関西学院大学)教育学研究科博士前期・後期課程を終了して、保育者養成の道に入る。大学院在学時代、2年間パート保育士として、主に、乳児保育を担当する。北陸在住は、前任校である北陸学院大学から10年目となり、保育士養成に全力投球している。

ただいまから記念シンポジウムを開会します。テーマは「保育の魅力—子どもの生活に寄り添う保育—」です。保育所、幼稚園、認定子ども園、保育者養成校の順番にお話をお聞きます。

【西村 健 氏】

以前は若松保育園という名前でしたが、認定子ども園になることも見越して、未来のひろばという素敵な名前になりました。

保育では、挨拶を大切にしています。職員は挨拶を徹底してやっています。子どもは、大人のやっていることを真似します。4歳児クラスにピアノ教室に週に1回通っている男の子がいます。理由は、男性保育士がピアノを弾いている姿を見て、子ども本人が憧れたというのです。大人が言って聞かせたことよりも、やっていることを見て真似するということです。

これは着替えをたたんでいる写真です。この緑の家具にたたむ手順が書いてあります。子どもはそれを見ながらやっています。スリッパの写真を撮って床に貼ると、パズルのように並べるといったゲームみたいなことを毎日楽しんでいる子もいます。

階段の真ん中のところに丸いシールが貼ってあり、手すりが両側について、上る時がこの右側の手すり、下る時は左側の手すりを持って降りてくるというような感じで整えれば、子ども達はそれを見て行動出来るようになるという考えを基に、環境構成をしています。

これは1歳児クラスのトイレとロッカーで、一人ひとりのオムツやおしり拭きが入っています。トイレの裏側の廊下からお母さんが、朝オムツが足りなかったら足していきます。子どもは、自分のオムツが濡れたと思ったら、自分のロッカーからオムツを取ってきて、保育士に援助してもらいながら換えます。自分でしたいという子ども達の気持ちを大切にしながら、出来ることを一つひとつ、少しでも増やしていくということです。

また、思い思い自分のしたいことをして1日過ごしています。金沢市の基準は国の基準の約1.5倍の面積であり、とても広がっています。半分は座ってじっくりと遊べる場、もう半分は走り回ったり、登ったり、ジャンプしたりというような動的な場です。

これは3～5歳児のクラスです。三つのクラスには壁がありません。ワンフロアにして、小さいコーナーに区切っているいろいろなものを置いています。

これは、台所にありそうな感じのもので、100円ショップやホームセンター等へ行って、子ども達が遊ぶおもちゃを安く作っています。子ども達が遊んでくれたらすごく嬉しいし、人気がなかったら改良を加えていきます。

キーワードは子ども達の自立を助けることです。そのため、子ども達が自分で出来るようになるための目印になるマークであったり、物の置き方であったり、声のかけ方であったり、お手本を示すやり方であったりというようなことを、日々考えるのが仕事です。子どもにお世話をしてあげるというよりは、子どもの様子をよく観察して環境を考え構成するのがこの仕事であり、一番大事なのは見ることに職員には言っています。

実は私も保育士になりたかったのです。うちの母が保育士をやっている、保育園の話を毎日するので、保育園の先生になりたいなと思いました。もう30年くらい前になりますけれども、母に「これは女の仕事だからダメだ。」と言われました。

そこで、保育士ではなく幼稚園教諭の免許を取り、幼稚園に勤めようかなと思ったら、今度は幼稚園から断られました。小学校教員の採用試験を受けましたが、なかなか合格せず過ごしていました。そんな時に保育園の園長にならないかと話があり、結局、最初に志望していた仕事に就くことができました。

自分達が受けてきた教育、保育に対する不満を、今の子ども達には少しでも良くして返してあげたいという思いでやっております。今から保育所、幼稚園、認定子ども園、小学校の先生になろうと思う人、ぜひ頑張ってくださいと思います。

【島田 裕香子 氏】

今年の4月から星稜幼稚園で園長をしています。その前までは保育園にいました。

保育の魅力というのはいろいろなところにあります。一昨年まで保育士会の会長をしていました。今日もその時の仲間が「応援団」として来てくれています。園も違い、年も違いますが、この仕事をするおかげで仲間になりそして保育のことを熱く語れるという、とても魅力がある仕事だと思います。星稜幼稚園の職員も一番後ろで応援してくれています。保育ってとても温かいのです。

先日15年くらい前に担任をしていた子どものお母さんからメッセージが来ました。私が担任していた時は身長110cmだった子が、今は185cmだそうです。このオレンジのユニフォームはアルビレックス新潟のユースの選手です。次にJ1に上がる夢を持ち進んでいると写真を送ってくれました。そのお母さんからのメッセージを読ませていただきます。

「ご活躍いろいろ聞いています。T男も悩みながら頑張っています。おかげさまで成長し、すごく大きくなりました。保育園のかわいい頃が懐かしくて、島田先生に病院に連れていってもらったと思い出話をしています。本当にお

世話になって感謝でいっぱいです。」

私がおんぶして病院に連れて行ったことを思い出して、家で話してくださっているということです。なぜ今私のところにメッセージをくださったのかと考えると、いよいよT男君が、自分の足で進んでいくという時期になり、お母さんが子育ての頃を振り返ったのだと思うのです。

母になるのはライセンスをもらうわけではないので、母という役割に悩んだり、苦悩したり、戸惑いながらも、成長していく時代だと思います。そして、子どもが独り立ちする時に、その子育てに奮闘した時代がよみがえり、私のことを思い出してくれたと思うとありがたくて、話をしながらも涙が出そうになります。信頼されているという嬉しさ、きっと私にこのことを伝えたら、我が子のように自分の子どものことを喜んでくれるだろうなと思い、メッセージをくれたと思うと、本当に失敗ばかりしていて、一生懸命だけが取り柄だった私のことをと、とても嬉しく子ども達のことを毎日丁寧に見るということで、大きくなった時もまたこういうご褒美が返って来るという、とても幸せな仕事だなということを感じます。

これは星稜幼稚園の園庭です。朝登園したら園庭でまず遊びます。ベンチで男の子同士が話していたり、朝顔の種を取っていたりする子もいます。サッカーをしている子もいれば、固定遊具で遊んだり、畑で収穫したりというような感じです。朝、まだ脳が起きていない状態で、室内で緻密な遊びをするというよりも、外に出て脳を起こして、体をいっぱい使って遊んだ後に、中に入って緻密な活動をするというふうにしています。それぞれが好きな遊びを選んで、自分なりのペースで感じて考えて遊ぶ楽しさを味わっています。

年長の部屋は積み木のクリスマスツリーがあり周りにLaQでプレゼントをつくり飾ってあったり、折り紙のサンタクロースが付いていたり子どもたちの発想でツリーが仕上がっています。これは自慢の日本海側で初めての温水プールです。水深が変わる可動式で循環水です。室内にあり、1年中入れます。子ども達のかわいい笑顔を見て下さい。

様々な活動を通してこのような笑顔が見たくて毎日仕事をしているのではないかと思います。

積み木の世界的なデザイナーの相沢康夫氏に、年長組へ積み木ショーをしてもらいました。子どもは、こんなまなざしで見ているのです。興味、関心があり、じっと見て、わあ、あんなの作りたいというような目をしています。このショーが終わったらやはり積み木に走って行って、一生懸命作っていました。

何日も何日も作って、そしてそのあとにこの子達が考えたことは、積み木ショーを年少さんに見せたいということ

です。担任はそれを受け、どんなふうにするかと投げかけると、司会、チラシを書く人、ショーをする人というふうに自分達で役割分担をし数日かけて、計画を立てていました。子どもがやりたいという思いでしますから、ものすごく意欲的、主体的です。

表現遊びの会では、その前に、保護者に趣旨を話しました。表現会という当日に出来ばえを見せるということに目的を置いた時には、教えてさせる、させられるということになるので、そこに子どもの主体性は全くありません。まして当日素晴らしいものにするためには、職員は「大きい声で言って、声聞こえないでしょ」とか、「もっと笑いながら歌って」というようなことになると思うのです。そうということが幼児教育ではないと思っています。表現遊びの会というネーミングの中に、教育のこだわりがあります。日常生活、遊びの中で興味、関心があるもので、いっぱい遊んで、そのまま延長線上で舞台に乗せてます。だから子ども達の主体性があり、とても楽しく出来ているということです。保護者の方には成功体験が大事なので、褒めてあげてくださいということを話して表現遊びの会が開催されました。

そして、表現遊びの会の後いただいた、年少組のお母さんの手紙を紹介します。

「私にとっても息子にとっても初めての表現会。やっぱり星稜幼稚園を選んで良かったと思わせていただけたことが随所にありました。いいな、素敵だな、嬉しいなと思ったのは、本番を迎える以前から始まります。K男に今どんな練習してるのと聞くと、息子は、『え？遊んでるよ』というのです。そんなはずはありません！表現会はもう1週間を切っています。本番では、先生方が、力んで、気負って、特別なものにしようとせず、普段通りのありのままの姿を私達に見せようとしてくださったこと、だから子ども達はとても本来の子どもらしい姿をナチュラルに伸び伸びと見せてくれるように思います。いろいろな子ども達の姿が見られて、ほっこりし、本当に癒された時間でした。先生方が子ども達にプレッシャーを与えず、気負わず、特別なものにしようと力まず、伸び伸びと進めてくださることは、ものすごく実は大変だし、難しいことだと思います。いくら伸び伸びと普段通りにとは言っても、まだ3歳から4歳の小さな年少さんともなれば、伸び伸びを通り越し、ぐだぐだとまとまったものにならないかと思います。先生があせらずにプレッシャーを与えず、させる、させられるものもなく、普段通りの遊びの延長として楽しませつつ、それでいてちゃんと一つの舞台として、数分間もの間子ども達がちゃんとまとまって、皆で一つのことをする。これってとんでもないことです。本当に先生の包容力と度量の大きさを感じます。全国のたくさんある幼稚園、保育園も

こうであつたらきっと日本の未来は明るく、平和で幸せだと思います。』

もうすごく嬉しくて、この仕事をしていてよかったと思います。皆さんにお伝えしたいのは、本当に一つひとつのことを丁寧に、重ねていくことで、子どもからもこちらが成長させてもらえていますし、何かひたむきにその時のことを一生懸命やっていくと、生きていくために大切なことに気づかせてくれるということです。この仕事って本当に素晴らしいなと感じていますので、どうぞ皆様と一緒に現場で頑張りましょう。以上です。

【木村 昭仁 氏】

プロフィールにも書きましたが、私は保育や幼児教育の専門家では全くございません。大学を卒業してから外資系の商社に入りました。日本に帰って来るつもりは全くなかったのですが、実家が寺で保育園を経営していたことから、跡を継ぐことになり、この業界に入ってきたのです。最初に思ったのは賃金が安いということです。また、社会的地位も低かったです。

私が帰ってきたころは保育所保育指針が改定した時で、一斉保育がなくなった時代でした。それまでは朝になるとミュージックが流れて、お片づけをしましょうなどとやっていた保育だったのが、保育所保育指針が変わって「一人ひとり」というものが入りました。あと「環境」という文字も入ったのです。

私は園長になって、二人保育士を養成校から雇いました。そしてその二人が子どもを見ているだけなので、「もっと子どもと一緒に遊ぼうよ」と私は言いました。すると二人から、「園長先生はご存知ないかもしれませんが、保育所保育指針が変わって見守る保育に変わったのですよ。」と言われてしまったのです。

この業界、知識とスキルを持たないと、肩書の園長は全く意味がありません。もちろんベテラン先生は上手いこなしてくれましたけれども、新人は怖いもの知らずですから、その時に主任だったうちの母のほうに怖かったのだでしょうね。おかしいですよ、私は園長なのに。その時に思いました。そこから勉強させていただきました。

その時に思ったことがあるのです。ヨーロッパで見た子育てと、日本の子育てがあまりにも違い過ぎて、もう愕然とすることがありました。

皆さん1回立って、相手を見つけてじゃんけんしてください。勝った人は負けた人の手首を持ってください。そして手首を持たれた人は目を瞑って。1、2の3で思いきり引っ張ってください。1、2の3ゴー。だめだめ、もっともっと、弱い、弱い。

これは何をやっているかといいますと、大人の目を瞑っ

たバランス感覚は、だいたい2歳児のバランス感覚。お母さんが「何言ってるの、私の言うこと聞かないの」というて引っ張っていく姿がまだ日本であるのです。ヨーロッパでは見たことないですよ。手首引っ張るなんてこと。それが保育や育児の専門家である保育園、幼稚園で日常茶飯事のようになっていないでしょうか。

ヨーロッパではどうしているかという、子どもが意思を持って繋ぐのです。大人は掴むことが出来ない。子どもが掴む。子どもの意思が尊重されているのです。でもそれは専門家ではないのです。普通のヨーロッパのお父さん、お母さんがやっているのです。

日本は、指示・命令だらけだし、見栄とか誰のための発表会、表現会、様々なことに対して反発心があったので、いろいろな改革をしました。もう20年前になります。遊びのこともやりました。例えば今一対一の食事、散歩も1歳児は一対一の散歩から始めました。もうその時は周りから変わった保育園と言われていましたけれども、世界常識からいったら当たり前なのです。逆に日本、韓国、中国が少し変とされています。

その事例をちょっと考えてみましょう。例えばこれはボーンという積み木です。

(積み木の実演。会場から歓声)

0歳はハイハイしながら、こうやって、こうやってしている。こうやって合せたり、何でもします。そして絶対積み木をかまないですよ。これは遊ぶための積み木だと分かっているからです。

例えばAちゃんが積み木をやっている時に、Bちゃんが「まーぜーて」と来たとします。積み木をやっていたAちゃんが「やーだよ」と返したら、Bちゃんは「先生まぜてくれーん」と先生に訴えてきました。するとまだ日本の多くの保育園、幼稚園では、「Aちゃん一緒に遊んであげて」というのです。そうしたら積み木を半分ずつにすると、面白いですか、つまらないでしょ。4分の1にしたら、どうやって遊べというのですか。

ということは何を言いたい。遊びをバカにしていると思うのです。どんな遊びをしたかというよりも、相手を気遣って先生の言った通りにやれば、褒められるということです。おかしくないですか日本って。先生の言ったことをやると良い子になれるのです。先生の指示・命令や大人の言うことを聞くと評価されるのです。それって根本的におかしいと思うのです。

だから遊びが出来た時に、分けてあげた時に褒めるのではなくて、「Aちゃんすごい良い遊びしてるね」と言いたい。子どもはすごい褒められたいわけじゃないですか。それが相手を気遣って遠慮したら褒められる。これは日本の根本的におかしいところです。これからアクティ

ブラーニングや主体的な遊びが、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、明確に、2年後に入ってくるのは分かっています。それなのに先生に褒められるために遊びを中断することの意味は何でしょう。

Bちゃんが来て、Aちゃんは嫌だといったら、保育教諭はこう言うべきです。「AちゃんがやっているからBちゃんは我慢しなさい。」そうするとどうなるか、自分勝手な子が生れる、とんでもない逆です。遊びを尊重してもらった子どもは、他の子の遊びも尊重します。Bちゃんがやっている時に、「うーんやってるね、うーんいいんじゃない、終わったら教えてね。まだ終わんないよね」と、こんな感じですね。それでいいのですよ。なぜなら尊重してもらった経験がある子どもでしか人の遊びを尊重することは絶対にできないからです。

でないと指示・命令でしか動かない子になります。先生がいなくなった瞬間に、先生いないぞ、よし、何やっても良いんだ。先生が何をするか、何を言うかだけきょろきょろする子ども達。全くアクティブラーニングとは関係ない。この辺が私を感じた保育と幼児教育の問題点だというふうに思いました。皆と一緒に我慢することが美德、それは違うというふうに私は思います。

遊びについてDVDがあるので、それをお見せしたいと思います。石川テレビと一緒に作って流したものです。保育内容を見ていただければ面白いと思います。

(DVDを見る)

以上です。ありがとうございました。

【福井 逸子 氏】

保育経験が15年、本当に保育の叩き台から養成校の教員になった人間です。だから今日いる学生さん達も、ステップ台として、まず現場に入って、頑張って勉強して、私の様に大学の先生になろうかと考えてくれている子がいたら嬉しいと思います。現に保育者養成校に入って10年目になりますけれども、現在、私の教え子で大学の先生を目指してくれている子がいて、非常に今嬉しく思っています。

養成校に入ったばかりの時は、自分の経験話、エピソードをするとすごく学生が喜びました。頭の中でシミュレーションが出来るので、非常に学生には響いていたのですが、それからもう十何年経って、あまり古い子どもとの関わりのお話をするとすることは、今の現場にいらっしゃる先生方にとっても失礼かなと思って、最近はこの切り札をあまり出さないようにはしています。でも自分は本当に叩き台から来た人間なので、こういう大学の先生もいるかなと分かってくれると嬉しいかなと思います。それで一

発奮起して、大学院の後期課程に入って、現在、院生を続けながら、研究とそれから教員と、主婦という三つのわらじで頑張っております。

最近、学生達とたくさんの子どもの写真を保育現場へ行った時に撮っていますので、今日はそれを紹介したいと思っています。

私のゼミナールでは、学生を近隣にある子育て支援のひろばに連れて行っています。イベント活動や地域のお母さんとの触れ合い活動をしています。

この日は、3年生の学生を連れて、活動を行ってきました。衣装や大道具、小道具も、全部学生のアイデアでやっています。

これは、石鹸ケーキです。お母さん達はもう大喜びで、家へ帰ってほしいと言われていました。私のゼミは出来ればお家に持って帰って、お母さんが子どもと触れ合う時の何か材料を学生が提供するという思いでやっています。学生自らが授業の体験を生かしてこういう石鹸ケーキを作ったというシーンです。これは、触れ合い遊びですけれども、前で学生がモデルを示し、お母さんがそれを真似て、今度はおうちでやってみようという活動に繋がっています。

これは穴水に行った時の写真ですが、まさに子どもと一緒にいるとこんなに笑顔になれるという学生の表情です。この学生は今附属の幼稚園の、ピカピカの1年生の先生で頑張っています。

これは食育です。穴水町にある保育園の子ども達と食育活動をしました。穴水の地場産の野菜とか、食材を使ってクッキングをしています。子どもの笑顔が、良い写真でしょ、この子なんかはスープをおかわりして一生懸命食べてくれました。

またこれは2年生の学生が、附属幼稚園にお手伝いに行ったところで、附属の幼稚園はこういった学生の触れ合いの場として、大いに役立っています。本学には、表現や造形、あそびなどのピアツアと呼ばれる工房があります。これは子ども学科だけの特権ですね。学生はここで、いろいろな自分の専門性を活かしています。

実は金沢市内には二つの保育士養成校と三つの保育の専門学校があります。私は前任校で同じ市内の大学にいたという経験があるので、今その大学と提携し、赤ちゃんサロンの共同研究を行っています。学生は月に1回その大学のサロンにお邪魔して、ここでもお母さんと触れ合い活動をしています。今日このスライドには出てこなかったのですが、学生間の交流ということでディスカッションをしたり、学び合いの討議をしたりという活動もしています。こういった遊びのアイデアもお互いが提供し合ったりしております。

赤ちゃんサロンで、生後2カ月の赤ちゃんのお母さんが学生にどうぞ抱いてと、非常に寛大に御自分のかわいい赤ちゃんを預けてくれるのです。本当に恐る恐る学生はこうやって抱っこしているのですね。最初にお母さんからこうやって抱っこしてねと、ちゃんと教わらないと私も恐ろしいなと思っているのですけれども、こういう貴重な経験しております。

私はこの赤ちゃんサロンは、自分の中にある母性が湧きあがるというか、やっぱりこの学生達の次世代育成の場として、子どもを産み育ててやっぱり石川県に子どもを増やしてほしい、そういう思いもあるのです。ですから、赤ちゃんに触れ合うことで早くお母さんになりたい、赤ちゃんが良いと思う機会をたくさん持ってほしいと感じております。

これは、男性保育士です。二人とも保育者を目指しています。どんどん男性保育者も増えて欲しいと願っています。保育現場と共同しなければ私達は実習も出来ないし、私自身も研究出来ません。ですから、本当に石川県の保育現場の皆さまには感謝しております。これからも末永くどうぞよろしくお願い申し上げますということで、発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

＜質疑応答＞

最後に、シンポジウムのテーマである「保育の魅力」「子どもの生活に寄り添う保育」ということで一言お願いいたします。

【島田 裕香子 氏】

1日1日にあったこと、嬉しかったこと、そして丁寧にしたこと、そしてそれを伝えていくということを、繰り返しながら子どもにとって幸せな人生を歩んでほしいと思っています。絶対この子は将来幸せになってほしい、そして今も幸せでいてほしいという思いを込めて、毎日保育することが大事だと思っています。

【木村 昭仁 氏】

まず保育、幼児教育というのは、私はアートだと思っています。アーティスティックです。まず教科書がない。学校教育で教科書がないのは大学と幼児教育だけです。決められていないということは学びというのは子ども中心であると同時に、現場の幼稚園教諭、保育教諭、保育士が作り上げるのです。そして教科書がないから、常に創造して0からスタートしていくわけです。

子どもが探索活動をしたら良いという文化があるはずなのに、それが家庭に伝わっていない。これは保育所、認定子ども園、幼稚園、養成校を含めた私達が子ども達の文化を伝えていない。だから保育や幼児教育というのは文化活動で、皆さんはアーティストになってください。管理者ではなくて。そういうイメージを持っていただくと面白いと思います。

【西村 健 氏】

子どもたちには、仲直りをするために喧嘩するということを伝えていきたいと思っています。義家 弘介氏の講演で、寂しくて暗いところに、寒くて一人ぼっちでいる子どもを見たら、光を当ててあげたくなるけれども、そうするとまた影の部分が出るから、光を当てるのではなくて、熱で温めてあげてくださいという話を聞きました。教育者というのはそうでなければいけないと思いました。子ども達に熱を伝えていくことを大切にしたいと思っています。

【福井 逸子 氏】

保育を天職にしてほしいと思います。私は10年間保育者養成をしていますけれども、最終的な私の夢は、自分の保育所を開設することです。保育は生涯夢を追いつけることのできる仕事だと思います。

シンポジストの皆様、本当に貴重なお話をいただき、ありがとうございました。これで、2015年度 人間科学部会シンポジウムを閉会させていただきます。